

聖書箇所：ローマ人への手紙7章13～25節

説教題：だれが私を救い出すのか

## 1 二つの誤解

### (1) キリスト者は「聖人」である

世の人たちは、少なくとも二つの点でキリスト教に対する誤解を抱いているのではないかと思います。

教会に行ったことのない方をお話すると、時々こんなことを言われることがあります。「教会に来る人たちはみんな聖い方ばかりでしょうから、私なんか行くようなところではありません。もう少し自分がりっばな人間になったなら、そのとき教会に行きます。」ここに集っている方はだれも自分のことを聖い人間だとは思っていないはずですが、でも世の人たちは、クリスチャンは美しい心を持っているはずだという先入観を持っています。キリスト者は聖い生き方をしている人たちである。これが一つめの誤解です。

### (2) キリスト者は悩まない

そして二つめの誤解。一つめのことと関連するかもしれませんが、キリスト者は悩むことがないという誤解があります。クリスチャンは、すべて神におゆだねして聖い生活を送っている。もちろん何も悩まないと言うことではないかもしれないけれど、少なくとも、信仰を持っていない俗世間の人々と比べれば、ずっと心穏やかに、神におすがりして生きていく。そんなイメージです。

皆さんもおわかりのように、そんなことはありません。神を信じたので何も悩まないということではありません。いや、むしろ、信じる前に比べて悩みが深まると言っている

かもしれない。

パウロは聖書の中でも飛び抜けた信仰者のひとりとして知られています。今日の箇所を読むと、あのパウロも実は悩む人であったことがわかります。ひとことで言えば自分は聖い人間ではない。そのことで悩んでいました。彼はなぜそのような悩みを抱えてしまったのか。そして解決はどこにあるのか。見てまいります。

## 2 キリスト者の本当の姿

### (1) 善をしたいと願っているのに

パウロは自分の現在の状態をことばを重ねて表現しています。まず15節。「私には、自分のしていることがわかりません。わたしは自分のしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」また19節。「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。」

前回も触れましたが、彼はあるときモーセの十戒の中の十番目の戒めを聞きました。そこには、「すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない」と書かれていました。ひとことで言えば「むさぼってはならない」ということでした。それを聞いてパウロは初めてむさぼることが罪であることを知りました。それ以来彼は自分に言い聞かせてきました。「むさぼってはならない。そんなことをしてはいけな。それは悪なんだ。」そのように心に刻みながら、言い聞かせながら生きようとなりました。

## (2) したくない悪を行っている

その結果、自分は神に仕える聖い生活を送っていると思いました。しかし次第に、違和感を感じるようになっていきます。パウロという人は誠に正直な人で、「おかしい」ということを誤魔化そうとはしません。正直に言うのです。むさぼることは罪であると知っているのに、でもむさぼってしまう自分がいる、律法を守ることでできない自分である、と告白するのです。

これを聞いて、「あのパウロがまさか」と耳を疑うかもしれません。こう書いてあるけれど、私たちにしてみれば非常にささいなことを大げさに言っているだけだ。彼は謙遜な人なので、それでこう言っているだけだ。いいえ、決してそうではありません。彼はありのままの自分を、大きくもせず、小さくもしないで、そのまま表現しているのです。

パウロは言っています。「私は、かえって、したくない悪を行っています。」律法を聞いています。何がよいことで、何が悪いことなのかはつきりとわかっています。わかっているけれども、そうできない。いやかえって悪いことを繰り返してしまう自分である。そういう告白をします。これを聞いて、皆さんはパウロでさえ悪から逃れられなかったのかと驚くかもしれません。

## (3) 「信仰が弱いから」か？

パウロの信仰が弱かったからでしょうか。あのパウロです。もちろんそんなことはありません。信仰が強いからとか、弱いからというような問題ではないのです。信仰の強かったあのパウロでさえも、自分ではしたいと思う善を行うことができなかつた。したくない悪を繰り返してしまっていた。であれば、私

たちはどうなのか。パウロにできなかったことが、私たちにできるはずがない。そうしますと、ここに書かれていることは私たちの大きな励ましになります。

私たちはどこかで誤解していました。信仰をもって救われたなら、自分はきよめられていって、すぐではないかもしれないが徐々に罪を犯さなくなる、聖い人になれるはずだ。でも実際はどうでしたか。受洗した当初は確かに嬉しかった。これからは、すばらしい人生が待っていると思いました。しかし時間とともに次第に感激は薄れ、「あれ、前の自分と何が変わったのか」と疑問に感じていったのではないですか。

少なくとも私はそうでした。今から十六年前のある時でしたが、自分の中にある罪をどうすることもできないと気がつき、妻の前で宣言したのです。「私はクリスチャンになるしかない。」早速、次の日曜日に自分から進んで教会に行き、牧師室に駆け込みました。「先生。受洗させてください。」そうやってその年のクリスマスに受洗しました。これで自分は新しい人間に変わるはずだ。そう思いました。自分は神を信じて、クリスチャンになったのだからもう罪は犯すことはないと思っていました。しかし、受洗してから数年してからでしたが、自分の中にまだまだ解決されていない罪の問題があることに気がつかされました。信仰をもったからもう大丈夫、ではなかつたのです。この経験は私にとって大きなショックでした。それ以来、私は考えるようになりました。自分は心では神を信じてはいる。けれども、まだ解決されていない大きな、何か闇のようなものが自分の中にある。これを解決するためにどうしたらいいのか。それが私の課題となりました。

最初は、自分の信仰が未熟だから昔の古い罪をまだ引きずっているのだと考えました。よし、強い信仰を持たなければいけない。そう決心して、いろいろなことを試してみました。それはそれで、私には大きな恵みではありました。では私の中の問題は解決したのか。いいえ、私の中には闇のようなものが依然としてある。何も変わらないのです。キリストを信じて、私は何も変わらない。私はだめクリスチャンなんだと、一時期、自分を責めるようになりました。

しかし、そのうちにこんなふうになっているのは私だけではないことに気がつくようになりました。現在、聖書宣教会の校長をされております鞭木由行先生は、数年前にこの教会にも来てくださってメッセージをしてくださったことがあります。その鞭木先生がこのようにおっしゃったのです。「私は、クリスチャンになったのにどうして罪を犯し続けるのか、そのことを悩んで、このローマ書にたどり着きました。」それを聞いて、悩んでいたのは自分だけではない、鞭木先生のような方でも全くおなじ事を苦しんでいたのを知って、心が軽くなる思いがしました。

聖書は教えてくださいます。私たちはたとえ頭の中で理想的なクリスチャンになりたいと願ったとしても、絶対になることができない。私たちは聖い者に変えられたいと願うけれど、なお私たちの中には神に背く罪を抱え続けている。パウロでさえ「自分は罪の律法に仕えている」と言わざるを得なかったのです。ですから、自分を責める必要な絶対がありません。まず、そこで安心をしていただきたいと思います。

### 3 苦しみの原因 そして解決

#### (1) 死の、からだからの救い

ひとまず安心してから、次に、ではどうしてそんなことになるのか、その原因のほうに目を向けていきます。原因がわからないままであるのと、わかっているのとでは、問題に対する向き合い方がまったく違ってきます。あらかじめ原因がわかっているならば、どんなことがあってもあわてることは少なくなります。

その原因についてパウロはこう言っています。23節。「私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」

パウロは「からだの中に」ということばをここで二度も繰り返して使っています。私たちのからだに、実は本当の原因があるのだと指摘しています。

このことをわかりやすく言えばこんなこととなります。例えば自分が癌にかかったとしましょう。そんな自分にある方から「あなたは信仰が弱いので癌になったのです」とは言われたらどう思いますか。だれだって納得できないと思います。すばらしい信仰さえあれば、絶対に病気にかからないと言うのですか。そんなことはありえないとだれでも知っています。信仰があろうか無かろうかが、からだの病気や弱さを私たちはどうすることもできません。これはまぎれもない事実です。

癌というようなはっきりとした病気だけではありません。私たちのからだは、いろいろな意味で弱さを抱えている。例えば、男性は肌を露出した若い女性を見ると、すぐにそちらに視線が行きます。律法には「姦淫して



を隠す必要はありません。理想的なキリスト者などこの世に存在しないのですから、そんなことで苦しむ必要もない。

私たちはこうのように告白できるのです。「私はあなたの基準に達することはできません。こんなみじめな私たちを助けて下さい。」そのような願いと祈りを神は喜んで受け入れて下さいます。